『体操させ、られ。してやられ』

作　山縣太一

作品概要

ト書きは俳優が戯曲を読み覚えて身体を使って発話するときに邪魔になる可能性がある。矢印を限定してしまう。と思いト書きを書かずに戯曲を書いてきました。今回はト書きを俳優が発話する台詞の中に入れてみたらどうだろうと思い台詞にト書きを組み込んでみました。実際に上演してみたら自分の想像を超えて観ている人にしっかりと情景を届ける事ができる事に驚きました。ただそうなるにはすごく言葉を選んで考えて書かないと難しい。課題としてはこの場所の説明と同じように共通の認識が生まれにくい事柄などをあまり多くない言葉で台詞にする。ということに今後はチャレンジしてみたいとこの戯曲を書いて思いました。今回の私の戯曲はこれです。よろしくお願いします。

岡田　喫茶店にいる2人。喫茶店と呼ぶには申し訳ないような夏は涼。冬は暖をわずかに得るくらいしか入店する意味は目を凝らしても耳を澄ましても見つからないような店。壁には馬か牛の骨が書いた油っぽい油絵がさらに年月の油をコーティングした状態で話のやり取りに手こずる足揺らす人々の泳ぐ目線の引っ掛かりとして機能している。店は老人と多分老人の娘の2人で切り盛りしてキリキリ舞。2人とも機嫌がよくないのが肩を見ればわかる。なぜそのような喫茶店に入ったのかはわからない。いわゆるスタバとか喫茶店ではなくてカフェと呼ばれる店があまり好きじゃないというのもある？

宮﨑　お前こんな店知ってんだ？

横田　小さい時に死ぬほど勉強してれば今ごろは。

宮﨑　大きい時に生き生きと体操してればタラレバ。

横田　あの頃は。この頃は。そのうちに。外に。

宮﨑　転がるコロニー。幕の内。味噌煮。

横田　真剣に話してルンバだから真面目にコーヒーでも啜っててぞな。

宮﨑　お前こんな店知ってんだ。と思われたい玄人に見られたい欲もすでに相手には勘ぐられているだろう。油絵から目を離し話にまた身体を向けた。

横田　こういう時だからこそやるべきっていう気持ちとこんな状況だから辞めるべきって身体に挟まれてベキベキなのねー。

横田　語尾が伸びてしまったのは言葉のお尻のあたりで狭い店内を徘徊する老人。多分店主の身体が自分の身体とぶつかったからだ。老人の腰骨が自分の肘と接触し思わず語尾が伸びてしまった。恥ずかしいが言い直すわけにはいかない。このまま語尾を伸ばす人で貫くか。今日は語尾を伸ばす人で歌舞くか。

宮﨑　語尾伸ばす人？語頭は溜める人？

鶴田　そんなことと同時に老人と接触して感じたのが老人はそこまで老人じゃないんじゃないか。という触れなければわからない感覚が肘のあたりに留まっている。娘だと思われた狐に似た女性ももしかしたら妻なのかもしれぬ。思えば電車などで老人が老人に席を譲っている光景を思い描いてほしい。もちろん思い描かなくてもいい。こちらから見たら大差なくても大佐と少佐ほど老人界は素人目線では解けない世界なのだ。のだは余計だ。すると目の前の男が、

宮﨑　喫茶店で待ち合わせした。久しぶりの挨拶も済んだ。このあと居酒屋のチェーン店にでも行こうか？

宮﨑　すでに居酒屋を意識しているのか目の前の男は頬が紅潮してきている。いるんだよな。すでに居酒屋を意識させてる奴。記憶に残る時間には歯切れ悪い奴。残さない記憶の中でしか冷奴できないやつ。こんな奴を呼び出したのが間違いだった。一人で喫茶店に入り店主の意外な若さに触れ自分自身を貪る軟弱な精神を鼓舞。目の前の男は身体の緊張を解き居酒屋の座敷にいるような体裁に。まだ喫茶店にいるのに。ただ目の前でこうも身体を変化させられるとこちらの身体も引っ張られ冷奴が頭の中から外出してくれない。

岡田　改まった話はホッピーでも飲みながらやりまひょか？

岡田　御意。

岡田　仰々しく答えるすでに座敷に座った状態の男はどんどん喫茶店に不釣り合いになっていく。

大谷　私は喫茶店を経営しているコーヒー好きの老店主に見られがちだが本当は人生で就職した事などついぞ無く今まで飲兵衛陀羅と生きてきた。この喫茶店ももちろんバイトだ。職を探してほうぼう駄目でダメ元で受けたここの喫茶店の経営者が頭の柔らかい身体の硬そうなパーマ頭の四十代くらいの脛齧りが面接でいいじゃん。コーヒー煎れるのうまそうじゃん。すげえジジイに見えるけど意外と若いじゃん。なぜか語尾のじゃんじゃんが鞭のように私の三半規管を打つ。採用じゃん。明日からよろぴく。パーマ。４

鶴田　０代。脛齧り。じゃん使い。嫌いな要素はストレートフラッシュだがわらをも掴むように私はじゃんに飛びついた。次の日から喫茶店の店長っぽい新人のコーヒーに一家言ありそうな私が店に立つようになった。ちなみにコーヒーは飲めない。カフェ・オ・レは好きなんですが。店に立つと客は私を見てコーヒーを頼む。コーヒーにうるさ型の無口で肩がおしゃべりな見た目ジジイのコーヒーに期待して。

岡田　この喫茶店は今の馬鹿息子脛齧り虫の父親が脱さらして始めた店で父親が亡くなり脛齧り虫に引き継がれたらしい。当初は脛齧り虫はBARか何かにしようと思ったが当時付き合っていたやはり肘齧り娘がレトロじゃん。アンティークじゃん。と誰でも言う。言いそうな事葉を根も葉もなく言い放ち脛齧り虫はその気になった。その木は生えた。根も葉もないまま。

横田　そのままチーままのように肘齧り娘はその店にいついた。つり目の肘齧り虫は油絵を幼少期から書いていた。もちろん自分の意思ではなく親から言われるがママに書かされていた。店の油絵も彼女の作品だ。よく見るとその絵は彼女によく似ていた。俯瞰もせずに全体図も曖昧な構図は彼女の身体そのままだった。何か自分の身体とも近い部分を感じでいたのかもしれない。

一見店長のバイトジジイは暇になるとよく油絵を眺めて過ごした。油絵と一言で言うのは簡単だがそもそも油絵とはなんなのか？すらバイトジジイにはわからなかった。ただ油っぽいから油絵なんだ。と思う事にした。人に聞くのは無知を晒すし、調べる程身体が油絵に興味を持ちえなかった。ただ店に来る人をあの人は油絵だな。この人は水彩画かな。その人は版画かな？と人を絵画のように見ることに面白味と自分を卑下する苦味とをブレンドしてジジイは自分のデッサンをなんとかバラバラにならないよう保った。

大谷　すいません。お会計お願いします。

岡田　別々でいいですか？

宮﨑　かまいませんよ。皆結局はお一人様でありんす。

横田　この店けっこう長いですよね？

大谷　年季すごいっすもんね。換気酷いけど。

鶴田　あいすいません。お客様が生まれる大分前からここにありもおそん。

鶴田　…。あの油絵はご主人が？お書きになったとか？いや失礼しました。なんとなくあの油絵とご主人が似ている気がして。なんでもありません。失礼しました。また来ます。

鶴田　生まれて死ぬまでにもう一度来ます。

大谷　居酒屋チェーン店に移動する事にした私達は喫茶店を背中に駅前の繁華街に歩を進める。

岡田　駅前には居酒屋のチェーン店がひしめきあっている。

横田　街角には居酒屋の店員さんが呼び込みをしている。

宮﨑　飲み放題やお得なプランを行き交う人々の導線に入りながら数秒で自店の良さをアピールしている。

鶴田　先程の喫茶店の中の時間とはおおよそ違う時間がここには流れている。

大谷　私の連れは喫茶店の段階で居酒屋の身体にシフトしていたためか、やたらと声をかけられている。

岡田　それをいちいち丁寧に聞き私の背中にここはどうだ？もう少し探してみるか？など声をあててくる。

横田　正直どこでもよかった。

宮﨑　椅子が比較的綺麗でビニール製のソファじゃなければ私はどこでもいい。

鶴田　除菌スプレーや除菌シートは持参しているし箸も使い捨てを常に

持ち歩いている。

大谷　私の連れがここにしよう。

岡田　二時間飲み干。

横田　簡単なおつまみ付き。

宮﨑　二千円。

鶴田　いいよ。

大谷　そこにしよう。

岡田　椅子は店内で確認しよう。

横田　立ち飲み屋なら座らずに済むんだが。

宮﨑　連れのうなじを追いかけながら手のひらに除菌スプレーをかけた。

鶴田　呼び込みの男に誘導されて居酒屋のチェーン店に。

宮﨑　がっしりとしたビルの二階が店舗になっていて細い階段を呼び込みの男と連れの男の後に続いた。

横田　三階は金融機関の会社が入っていてテレビのコマーシャルで見たことがある名前が書いてあった。

岡田　私は低所得者だが金融機関から金を借りるほどではない。

大谷　ギャンブルもやらないしのめり込むほどの趣味もない。

鶴田　就職もしたことがなくフリーターのまま不惑に突入してしまった世の中から見たら世の外の人非人だ。

宮﨑　連れの男も私よりは若いが状況はあまり私と変わらないだろう。

横田　実家住まいという事で一応見た目は余裕があるような身体をしてるが眠れない火曜日の夜から水曜日の朝を迎えたりもしているだろう。

岡田　木製の引き戸を開けて店内へ。

大谷　思いのほか店内は賑わっている。

鶴田　喫茶店を出たのが何時だったか。

宮﨑　まだそんなに遅くない時間だと思うが店内は混んでいた。

横田　椅子は私の心配をよそに引き戸同様木の椅子だ。

岡田　二人用の小さなテーブルに通される。

大谷　小学校高学年の男子の背中くらいのテーブル。

鶴田　連れの男と向かい合う形で座る。

宮﨑　隣のテーブルは四人掛けでこちらの方が広くていい。

横田　もちろん小学校高学年の男子の背中二人分という事だ。

鶴田　連れの男と向かい合う形でなんとなく正面をお互い避けて身体を捻りながら小一時間。

岡田　飲まないと恥じらいもあって話は散弾銃のようにあたりを彷徨う。

宮﨑　連れの男とはもう長い付き合いだが二人きりで飲むなんて初めてかもしれない。

大谷　世間話からお互いの近況を絡めて今後の展望。

横田　野暮な野望。

大谷　思うようにいかない中で思う事は自由だ。

宮﨑　連れの男は酔いに任せて誰かの言葉を借りてイタコする。

岡田　人が一人いたらとんでもねーエネルギーだ。

鶴田　と口の端に唾を泡立てて言う。

宮﨑　飲み放題のハイボールに何か入ってるのか?と疑う。

横田　ほどに誰かの言葉でその場に自分がいたことにする。

岡田　沸点と合点を履き違えてる。

大谷　正面を避けて身体を捻りながら注ぎこむハイボールで私も胃腸も独り言のような念仏を身体の中で唱えている。

岡田　外出するイタコと内包するイタコ。

横田　似た物同士だから付き合いもつかず離れずなのかもしれぬ。

宮﨑　店内は以前賑わっているが少し客が入れ替わりはじめている。

鶴田　飲み放題で二時間を過ごした一時的に陽気な陰鬱な人々は帰り自宅。

岡田　ふと入り口の方を右目の端にとらえる。

宮﨑　木製の引き戸が開いて喫茶店のパッと見店長の老人ときつね顔の女性が入店するところだった。

横田　パッと見店長の老人ときつね顔の女性は自分達に気づくはずもなく隣の小学校高学年の男子の背中くらいの４人掛けテーブルに腰を下ろしなぜか対角線に座った。連れの男は老人ときつね顔の女性にはまったく気づかず声のボリュームは一時間前よりは大きめにやるなら今しかないみたいなニュアンスを言い続けている。当然興味は身体の左側の老人ときつねに向けられる。

鶴田　老人は女性に敬語を使っている。女性は敬語を使っていない。もしかしたら二人の関係は当初思っていた関係とは違いそうな雰囲

気だ。ひとしきり雑談が済むと二人は絵画の話をしはじめた。このあたりから連れの男の声のボリュームが一時間前とは違い腹から声を出してるのかと疑うほどのペラペラなオペラ。正面から野太い精神論を聞かされながら身体の左側の会話に集中する。身体の右側が寒くなる。どうも二人は喫茶店に飾られていた油絵について話をしているみたいだ。野太い精神論と混ざり合いそれは何か技術的な段階を超えた一握りの芸術家しか到達できない高尚な会話のようだ。

宮﨑

連れの男の声が飲み放題の二時間でどれほど大きくなるのか。今がピークであってほしいのだが。身体の左側に意識を集中して聞く。身体の左側全部が耳のよう。第一印象店長の老人が喫茶店に飾ってある油絵の話をしている。きつね顔の女性は鍛高譚を飲みながら気もそぞろ。目線は遠泳。ふときつね顔の狐目が光る。どうも鍛高譚は飲み放題のメニューにはなかったよう。つり目が少し垂れた。老人はごちそうしますから遠慮なく注文してください。と言って垂れた目をまた吊ろうとしている。連れの男がおもむろにピカソだってあれになるために今までのこれを捨てたんだぜ。

岡田

酔いがまわりあれやこれが増えてきている。二時間の飲み放題で時間いっぱいきっちりしゃぶりつくすあたりまだ若気が抜けきってないか。あれになるためにこれを捨てる。簡単じゃない。貧しい食卓で心を決めるほど血気メガ盛りじゃない。試みを捨てぬように肺で呼吸する。隣の老人が息を吸う。その時にこちらは吐く。言葉を言い淀めている息の吸い方だ。隣のテーブルが飲み放題の二時間をもうすぐ終えるのか肩をいからせて言葉のお尻は聞き取れない男が鼻の頭にイカ刺しを乗せている。

大谷

相手の男はなぜかこちらに意識を向けている。よく見ると先程喫茶店にいたうだつの上がらないまま不惑に突入したように見える二人組の男。喫茶店では立場は反対に見えたが。二人組はまるで絵画のようだ。複雑な関係や感情が無意味と意味に味付けされてそれなりのコクを出す。刻一刻と刻む彫刻のように残酷な人の道。パッと見店長の老人が目の前の鍛高譚に何かをお願いしている。よければ譲ってほしいみたいなニュアンスを身体の左側が聞

横田

き取る。何かしら？いかんせん鼻の頭にイカ刺しを乗せた単語が酔いのせいで出てこないであれやこれのタンゴになっている男の声や存在がデカすぎて老人と鍛高譚の蚊のさすような声の全身が掴めない。イカ刺しを黙らせるか。たこ焼きを口に詰め込むか。イカ刺しを鼻の頭に乗せた男はメガハイボールを飲みながらチューハイをチェーサーにして目が肺のようだ。リンゴスターの曲だと思っただろ？あれはポールの曲なんだ。なあペーター？

もうこの男と一席を設ける事は難しいだろう。隣のテーブルの鍛高譚は老人のお願いを何の気なしに鍛高譚と一緒に割って飲んだみたいだ。老人は嬉しそう。喜ぶ老人を見るとやはりそんなに年老いてもいないんじゃないかと思う。老けてる同級生が同窓会でようやく年齢に見た目が追いつく。やや追い越す。回り込まれる。なんて事があるのかもしれない。連れの男の盛り上がりと比例する明日の駄々下がりが透けて見える飲み放題の二時間を終えた。まだ老人と鍛高譚は話し込んでいる。

岡田

小学校高学年くらいの男子の背中テーブルから立ち上がる際に連れの男がフラついて鍛高譚にぶつかった。老人は見た目では想像できないスピードで連れの男の手を掴む。連れの男の右手が先ほど食した海老フライのようになだらかに曲がった。酔いもあるのか連れの男は状況がいまいち飲み込めないようで薄く笑いながらハイハイわかりまひたよ。払います。払います。と老人に背中を向けた状態で方向が定まらない言葉を自分の前に吐き出す。鍛高譚は素知らぬ顔であん肝ポン酢をぱくついている。履いているパンプスは半ば脱げかけている。私はその一部始終を頭の中に手早くラフスケッチ。望んでこういう構図はなかなか作れない。自然の産物だ。無意識の創作料理だ。老人は短く二人組の男に頭を下げた。

大谷

老人はもう男の手を離している。私があん肝ポン酢を食べている間に何かあったのかしら。あったらしいわ。ジュレというのはなんなのかしら？昔からある言葉？お酒は鍛高譚しか飲めないんです。よくドンキホーテでまとめ買いしちゃってます。私は中卒のパンパカパンでもちろん群馬出身。家は品は無いが裕福だったから小さい時は習い事もたくさんやった。やらされてた。ピアノ。油絵。習字。あとから思えば少年院でもやれることばっかりだか

ら少年院に入ってからやればよかった。どれも才能なんてなかったがひとつのことに集中するのは好きだった。ひたすら絵を書いたりピアノを弾いたり。墨汁を使って墨汁と紙に書いたり。少年院に入ったのも友人からピアスを開けてほしいって頼まれて集中して何も見えなくなって友人の左耳を取っちゃった。友人の左耳を手にして目の前の左耳がない友人を見てなんで左耳がないのかと聞いたけど友人はその問いには答えない。私は自分が持っている耳は誰の耳なのか？もし良ければ友人につけてあげたいと思いつつ今日は裁縫箱を忘れてきたような気がする。自分にできる事を手をぬかずにやりました。親にも警察にもそう答えた。少年院でもピアノを弾いて絵を書いた。墨汁を使って墨汁と紙に書くのは団体生活の中ではやらない方が身体のためだと勘が私より働いた。

宮﨑

喫茶店から居酒屋チェーン店を経て酔いに任せて時間を肴に踊る連れの男。学がある分だけ分裂症大盛りが効果不幸か。遠い目しながら近い身体で戦争を生きてるうちに体験したかった。これからの人生で体験できるだろうか？この男に何を相談しようと思っていたのだろう。何も言わずに岩みたいに付き合ってくれて砂。サラサラ。戦争を体験できるかはわからないけど何かから必死になって逃げてるのは戦時中となんら変わりないよな。

鶴田

カメラを老人に向けよう。語り手も老人にバトンタッチしよう。その方が収まりがいい。今までは話のおさわり。これからは私が納めていく所存。お変わりは自由なのはおわかり？老人はつま先を酒のあてにして先の事などあてにせずすかすかのキャベツのように年を重ねるでもなく過ごしてきた。今さら急に何かが好転する訳じゃなし、根木がない。根気か。眠気しかない。食うための仕事もなかなか続かず、転転、小銭を拾いやすいのは下を向いてるからか。喉仏が歌うのは安い酒のせいなのか。ちょうど仕事も無く仕方なくグルテンフリーをしているここ一週間は不心議と小銭を拾わない。むしろ落とすようになった。右肩が右向きゃ左肩は左か。体調はいい。Aに近いB。心根もいい。Bに近いC。恋でもしたいC。ただ人を好きになるのはしんどい。心根が腐る。芸術的な俗物とまず触れて結果その先に人の身体、他人の心根と重なる。

岡田

話の語り部を私に移そう。物語のカメラも今はシンプルに私を写そう。自分で作る自分の作品に自分で主演する。その人生では脇役でもこの作品の中なら主役だ。バランスを取っているつもりは無いそもそもバランスなど無い。過剰と過剰の便宜上だ。私はカメラの中にいて外にもいる。年をとった人が年のいった人を撮る。カメラの中におさまる年をとった方がじっと絵を見ている。見ていないかもしれない。体を向けているだけかも。でも絵に対して気持ちを向けているのは誰がどう見ても。絵から人間を抽出する。抽出している。そんな風に見える。少なくとも建前の上で絵の前に一定の時間自分の身体を置いておかないといけないといった誰かの演出や他人へのおののきは感じとれない。自分の考えで振付けでそこにいてその絵の中から自分の身体を使って他人を抽出しようとしている。カメラの外にいる年をとった方はそう読む。解かない。解けないのじゃない。

宮﨑

自分とは違う人間の心根に触れるのは難しいのか？深く潜る必要があるのだろうか？そもそも深く関わるという事とは？何回ももしもしする事ともちと意味が違う。珍味な言葉を交換してともすれば好感を袖の下に這わせる事とも無論論外だ。では何が論内なのか？そこで芸術が重要な役目を担う。今までは脇役。他人と関わろうとすると急に芸術が主役。芸術といっても高級なものじゃない。敷居は低い。というか無い。家の購入はローンG、芸術による関わりは論じ得ない。つまり積み立てたり、借り入れる物ではない。今の自分が大きくも小さくも見せずにただそこにある。置かれる。位置につく。自分とは違う人間との関わりを求めて土中に潜らずに他者の目線に心を配る。

横田

転々としたつまずきの途中で喫茶店の雇われ店主つまり店番をやる流れになった。この流れというのは不心議と厄介だったり奇怪だったり。心じゃないか。ふしぎのしは思うか。心の中での事と思う事は別であるのか？転がるつまずきのひらめきはいつもひらめきのまま。いつまでもヒラメ筋止まりでさぁ。そこばっかり鍛えてもなぁ。小さなあはいつもさけるチーズのように行き先をひとつには定めない。使い勝手はいいが使いすぎは自分を見つめる他人の焦点が定めにくい。

しかしながら自分の重心が前のめりにめり込んでもまだ自分の老いには無頓着に着衣。おいおい気づくもんだと油断してたら背後から軍団。前のめりに老いる。振り向けば後ろぬめり。すれ違う老人も２０年前は老人じゃない。あたりまえにはずれうしろ。気持ち掻き回されて身体砂袋。脱衣所でズボン脱ごうとして転倒。頭から点灯。サンバのリズム。長ズボン危ないよ。短パン履きのじじいは転倒したくないからか。老いは学ぶこととイコール。トータルに利口ル。負けを認めれば勝ち癖がつく。言い訳の分け前。パケ放題。目を開けて閉じてまた開けたら目の前が天井だった。気を失っていろいろ失っていたみたいだ。足先に触れた長ズボン。所在なさげ。私自身住所不定。長ズボンが申し訳なさげ。気にせんでよか。おいどんの不注意ですから。老いは学ぶこと。長ズボンと会話すること。トータルに滞る。身体に染み込む酢酸。もう沢山。長ズボンと二人三脚。ていうか四つ足歩行。

大谷

絵画にはまったく興味がないが書いている描こうとする身体には理由もなく興味がある。醜さや美しさでは言い表せない長時間の言い争いが自分の身体の内側で年始からずっと続いててもう八か月くらい。そこそこの八ヶ岳。身体の内側の稜線に沿ってゆっくり迂回するように尾根を歩く。たまには自分の内側を迂回しながら歩くといいよ。老いは迂回しながら歩くこと。物事や悩み事も迂回しながら山の全貌を眺めて尾根をウネウネ歩いてみればいいアイデアも寝る寝る寝るね。鼻から風船出てます？また長ズボン脱げてた。目の前に天井。背中に感じるバスマット。足拭きで背中拭いてた。スパイダーマンてこんな感じかな？違うか。上半身を起こすとバスマットが背中にマントのようにくっついていた。何マン？人生はラフスケッチ。って誰か言ってた？どういう意味？ある意味共感。本気だせばいけた感残して死にたいみたいな。ある意味反感。だせるなら本気だせよ。ていうかいつも本気でやれよ。身体の中で教官が鬼。無作為に絵画を気が向くまま身体が向くままに集めていると絵というのは何一つとして同じ物が無いことに驚く。驚き方はムンクより下。さらに紙質。絵の具。筆。フランスパン。炭。多士済々の足し算手算。それを描く書く身体も十人十色百色。エリートも汚職。和尚の幼少。人生はラフスケッチ。どういう意味？わからないけどわかる。目覚めたら空見てた。野外でなぜ私は長ズボンを脱ごうとしたのか？長ズボン

横田

に問う？長ズボンはパフんと笑いながら訝しげに私を横目の半開きで見ている。もう一度考える。私は外で長ズボンを脱ごうとした！上半身は戦慄いている。下半身は身震いしながら畏怖。青空も描いてみればそれぞれの空。青じゃないかも。色もないかも。ズボン履いてないかも。それぞれに見方や味方も違う。生い立ちも違う。老い方ももちろん違う。片手でボールペンを回せる人。口笛が吹けない人。鼻の下にいつも汗を溜めてる人。鎖骨の場所がわからない人。無様にさまざま。桶狭間。

老いてもバイトしてなんとか食い繋いでいるメンタル弱めのこじらせ気味のこじるりです。ゴホゴホ。咳き込んだんじゃないんです。自分の内側にスキューバした音です。ゴボゴボ。誰かのせいにしなければ明日を迎える前に昨日からフルボッコ。一昨日は傍観者。先一昨日はトイレがちかい。いい人間にならなきゃ長生きができるんだぞ。って若い奴等にこっそりSNSで伝えたい。直接話してもいいけど怒られたり殴られたり長ズボン脱がされたりしたら二度と水面に上がれない。三度目は土中。今年は喪中。いじめや嫌がらせを受けている自分の身体に未だ夢中。無知でいるといつも新鮮。鮮度抜群の鈍痛。俺が悪いんじゃない。俺の身体が起こした現象が悪い。丸くなるな。バツが悪い。被害も加害も内外で起きるちょっとした内戦。宗教や文化の違い。書く絵も違う。目を覚ましたら目の前にラッセン。年に一度くらいは目覚めのラッセン。接戦の一回戦。会話ずっと脱線。畝る稜線。

岡田

素直になれない人に言いたい。素直なんてないと。素曲がりしかないんです。曲線を描いて尾根を歩く。しかないんです。ちなみに私は自分の内側にスキューバの真っ最中。ダサいですか？自分の内側にスキューバできるライセンスが年一で伊豆で取得できます。詳しい情報は今しばらくお待ちください。聡明な素麺のような心で絵画に向き合う。誰もが素通りするようは作品も素曲がりな私にはスマッシュヒット。もともとアルバムの7曲目あたりが大好物な私です。大きい声じゃ言えないからくちびるの動きで読み取ってもらいたいんですけど最近恥ずかしながら自分でも筆を持ったり回したり鼻の下に汗を溜めてたりしてるんです。先日見かけた男性の二人組が妙に絵画に見えて。ああ書いてみたいな。と無意識に墨汁を硯に差してました。なんというか書くんじゃな

い書かされるんだ。欠いて欠いて海底で水面を見る。真っ黒い墨汁のような水面。体面は滑らかなMacBook Proのよう。

宮﨑

バイト先の喫茶店のオーナーの女。まだ記憶に残っていますか？そうそうキツネ顔の鍛高譚です。絵画を趣味に持っている。正確に言うと精神安定の為に書いている鍛高譚から絵の具やエノキを分けてもらう。絵に関係ない物は本当は不要なのだがこちらの思った事があちらに伝わらないのは今がスタートじゃない。ながめのフルマラソンはまだゴールが見えない。諦めない。エノキを調理しながらさもしく吠える。頭や身体で考えたり思った事が他者に伝わった試しが皆無。死んだあと本になるならタイトルはカムイ伝。和冠。バターの香りがふっと踊ります。ゆっくり動くダンサーのようにバターの香りが私のそばに立ちます。鍛高譚にはちゃんと私の意思は伝わっていたんだな。エノキのバター焼きはうまい。他者との会話もゆっくり動くダンサーのように尾根をウネウネ歩けばよい。会話はずっと脱線。本音の周りをぐるぐる回る。バターになるまで夜が開けるまで。ヨガやったりセガサターン引っ張り出してきたり。穿った見方してみたり。

鶴田

絵を我流で書いているとその絵を描いた時期やその時の身体の状態が絵から伝わってくる。その時にはわからない当事者感覚から少し距離を取って自分の状態を観察できる。ような気がする。バイト中に鍛高譚にそのようなニュアンスの話をしたら我流なんて言葉を実際に生きてる人間の身体に乗ってる顔の口の部分から笛のように発せられるなんて思ってもみなかった。読み言葉の世界にしか住んでない言葉かと思った。我流。口にしてみればそんなに使うのが困難な言葉じゃないわね。今モラルのダムが決壊して濁流よ。鍛高譚と絵の話しをいまだにした事がない。それでいい。それが一番いい。秋の衣替えをした山の稜線を人に懐かないキツネが走る。表現できない色の試みがそこかしこでおこる。わかりあおうとする気持ちがあればわかりあえない事なんてたいしたことじゃない。鍛高譚にはいつも何かしら気づかされる。キツネにつままれる。この言葉も実際に使う人なんていないかもな。書き言葉の世界に住む言葉。か。

大谷

いくつかの絵を描いてみたところでようやく書く動機になったあ

の二人組を書いてみようかと思い立つ。また座る。どう書こうか？色は？筆は？悩む。悩む悩むすやすや。寝違えた。寝正しく寝る。長ズボンがどこに行ったかな？あれ一本しか持ってないんだよな。正確に言うとあるんだけどストレス無く身につけていられるのがあの長ズボンだけなんだよな。一張羅。ズボンは一張羅って言わないのか？あの二人組はあの時着てた衣服はどんな物だったろうか？ぼんやりとしか思い出せない。お洒落でもなく着る物に無頓着にも見られたくないギリギリのある意味攻めた服装。変わった形のシャツやパーカーを着ていた方が声が大きく気が小さいように見受けられる。もう一人は全身を無印良品で揃えました。私が有印の粗悪品です。みたいな没個性が沈んだ勢いで浮かび上がってきたような木を隠す前に見つかったみたいな男。どちらも正規雇用ではないだろう。身体からネクタイや背広を想像できない。

横田

肌に合わない衣服は無理して着るな。話の合わない人とは何かしら合わないものか探してみてなけりゃ縁を切りな。ゆっくり動くダンサーの動きの中に速さを感じなけりゃそのダンサーはゆっくりなだけだ。山の稜線をウネウネ歩く。物事を考える時もそうだ。人懐っこい人や言葉には気をつけるんだ。山キツネには一定の距離までしか近づけない。あの二人組も何かしらお互いの領域のようなものが存在していて稜線を歩くように会話していた。見栄や保身など身体を大きく見せたり縮こまってみせたりしないでありのままに無知を小学生高学年の背中くらいのテーブルに並べていた。浮かべていた。注いでいた。つまりは裸だった。裸婦だった。ラフに裸婦だった。無意識下におけるモデル化した裸婦。見られていると意識が働き物だから大事なニュアンスが溢れちゃうんだけど無意識下の裸婦だから溢れずに淵までヒタヒタ。無様な美しい外様大名。富や名声の意味すら分からずに苦い酒を飲み込めずに舌の上でゆっくり踊らせる。

岡田

何枚かラフスケッチしてみたがなかなか納得のいく絵が立ち上がってこない。また自分の内側にスキューバ。構図が悪いのか？色合いか？そもそもの自分の画力が底辺かける高さわる二だからか？スーパーのチラシの裏紙だからか？あの二人組の並々ならぬ並な感じがどうしてもうまく表現できない。また実際に会えれば書けるのか。でも会える可能性は低いだろう。バイト先の喫茶店

にはあの日以来顔を出してないし、チェーン店の居酒屋にはたまにふらっと入っても二人組がいた事はないし。チェーン店の居酒屋で私が見たあの二人組。

一人は私に手を掴まれた。しかし私がもっとも描きたいのはもう一人の全身無印良品の有印の粗悪品。自分の目の前の光景を絵を観るように観ていた。ワイドに観ているようでピンポイントに観ているようでもある。近づくように俯瞰するように目の前の光景を見ていた。そういう見方や態度が実際に一人でいる時じゃなくできる事。発動させられる事。そういう姿勢に身体のベクトルを持っていける事に対して私はその時にははっきりわからなかったが時が経つにつれハッとしてギュッとして沸点。学びの加減じゃなく生活からむせ返る芸術的視点。うまく説明できない。喉が渇く。乾く。絵の具が迷いの時間だけかわく。無意識の人間の頼りない漲り方。そういう部分に部位に私は興奮するのかもしれない。鍛高譚にその旨をかいつまんで話す。鍛高譚は無言だ。二人組と隣り合わせたチェーン店の居酒屋にバイト終わりに二人で寄って酔った。鍛高譚は飲み放題のメニューに鍛高譚が入ってない事をいつも新鮮に驚いて怒る。彼女もまた生活からむせ返る芸術家だ。鮮度にしか興味がなく鮮度のために昨日までを売り払う。鍛高譚は群馬出身。休みの日にドンキホーテで鍛高譚をまとめ買いしているらしい。意外とドンキホーテの商品は安くない商品も多いからよく見て買わないと風車に顔から突っ込まれるよ。と毎回二杯目の鍛高譚終わりにその話がスタートする。

鍛高譚とはなんだかキツネが合う。馬が合う。男女とはいえ恋愛感情もなしの礫だし。梨か。群馬県はこんにゃくと中山ヒデちゃんが有名と鍛高譚は言う。ヒデちゃんの下の二文字がわからないけどグングるほどじゃないと思っていたら帯状発疹。ほっしゃんも本名わかりまへん。発疹。生きにくい世の中ですからね。鍛高譚は飲み放題で言いたい放題。でも鍛高譚は飲み放題のメニューには入っておらず。うまくいかないものよのう。のうのうと生きておめおめと飲んで発疹。人間が一人いればそこには凄まじいエネルギーがあるとか。彼女も静かにけたたましく発光している。発疹して発信している。ソーシャルでもメディアでもない。彼女は肉弾戦専門だ。鍛高譚が書いた絵を何点か見せてもらった事がある。発疹だった。発疹そのものだった。他者と自分との違いや距

離などから自分の身体が耐え切れずに起こす発疹。そんな彼女の絵はいつまででも見ていられた。綺麗な蝦蟇のような絵。失礼か。